

共同性、公共性、そして社会

田中 重好

I 社会学の出会い

インケスル『社会学とは何か』

社会学を教え始めて

社会には三つの局面がある

1. 「内なる社会」
2. 「周囲の社会」
3. 「社会それ自体」(全体社会)

社会学の基本

「共同性の科学」としての社会学          実証科学と規範的議論

社会をどう分析するか      塩原勉より

社会的行為 ⇒ 社会関係(役割) ⇒ 社会集団(組織) ⇒ 社会制度 ⇒ 社会

社会に関する実証的分析      博士論文副題「都市祭礼、災害、雪、地域交通」

1. 反公害の住民運動
2. 大都市圏の郊外地域の町内会      ⇒ 都市化とコミュニティ
3. 町内会の歴史      町内会の成立
4. 都市祭礼                  ⇒ 中国チワン族のマーグワイ節
5. 日本海中部地震  
⇒ 台風 9119 号、北海道南西沖地震、阪神淡路大震災、スマトラ地震、東日本大震災
6. 雪国の暮らし、雪処理と流雪溝
7. 地域公共交通

これ以外にも(未公刊、論文にならなかつた、途中で挫折した)、具体的なテーマとしては、道空間、中間(端空間)、都市軸、地方都市論、白神山地の暮らしと環境、大型店舗と商店街、地方分権化、市町村合併、地域の総合計画、河川整備計画、水都再生、中国の郷鎮企業、国有企業改革と社会保障制度、唐山地震の国際比較研究

共同性に関する最近の議論      「社会的調整メカニズムの喪失」

中国における改革開放以降の社会格差の拡大と環境の悪化

スマトラ地震後の、国際 NGO のバブルと支援の乱立、その結果の非効率

## 共同性の設計

1. 災害時の地域情報システムの提案
2. 地域公共交通の維持方策の提案 ⇒ 青森県津軽地方の路線バス維持方式

## 共同性から公共性がどう形成されるのか

1. そもそも共同性とは何か  
共同性が具体的に可視的な形となった時には  
価値、認識、感情、行為、関係、運動、組織、制度、財、空間の次元で
2. 共同性から公共性への回路  
場の共同性⇒ 自覚的共同性⇒ 目的的共同性⇒ 公共性
3. 公共性とは何か  
公共性を、行政の政策的公準とその正当性を担保するための手続き  
公共性と共同性の違い 税金と町内会費
4. 日本における公共性 評判がよくない民主党政権での「新たな公共」の提唱  
国家による公共性の独占 「官の公共性」  
それが、多元化 「地域から生まれる公共性」の可能性が出現しつつある

## II 社会学と言葉

社会学の言葉 分析の言葉、理念の言葉、生活の言葉

言葉を考え始めたきっかけと、言葉を考えることの必要性

⇒ 最終的には、「地に足をつけた社会学をする」、「月光社会学からの脱出」  
社会学の普遍性と、それぞれの社会の固有性

### 具体例

#### 1. 公と私

公私の国際比較

西欧の公私をモノサシに、公私を分析し、評価することの「限界」

ウェーバーの客観性論文 理念型の提唱と、「生の言葉」に対する否定的評価

#### 理念型

『「理念型」は、評価的な判断とはまったく無縁であり、純然たる論理上の『完全性』以外には、いかなるものともかかわりをもたない』(132)

「生の（現場で語られたままの）言葉」(150)

「日常の話し言葉で使い慣れている未分化な集合態概念を用いることは、つねに、思考ないしは意欲の曖昧さを覆い隠すすべであり、しばしばいかがわしい癒着の道具としても使

われかねないし、いずれにせよ適切な問題設定の発展を妨げる手段となる」(157)

理念型的なモノサシを使えばいいという、単純な議論ではない  
それぞれの社会には、固有の公私の構造がある

## 社会

1. 日本語の社会は翻訳語
2. 社会にも、理念が含まれている
3. 中国に「社会が生まれている」という実感
4. では、どういった思想・理念が社会に含まれているのか
5. 現在、われわれは、“Society”の意味を理解しているか 間宏の問いかけ

## Ⅲ まとめ 日常の言葉に帰る

社会学は、メタ言語ではなく、自然言語の上に成立している

メタ言語を用いた社会学は、社会学の社会的意味を殺いでしまう

自然言語としての言葉は、三つの意味・言葉

日常の言葉、分析用語、理念（思想）の言葉

もっと厄介なのは、この三つの側面が切り離しがたいこと

相互の影響している

純粹に「分析の言葉」として使っている言葉が、無意識的に価値判断を帯びてしまう

戦前の「社会」（左翼的な意味、反体制的な響き）と、戦後の「社会」

日常用語の雑多性・多様性・時間的に移ろいやすいことを否定するのではなく、その「豊かさ」を正しく認識し（これまで、これすらできていなかったことは、「社会」をみても明らか）、その「豊かさ」「面白さ」を活用する

⇒ その点で、有賀喜左衛門の公私論の重層構造論は重要だ

そのことによって、「足が地に着いた」社会学が、日本において成立する基礎である